

### 3 子育てに対する負担感の増大

#### (理想子ども数と実際の子どもの数の差)

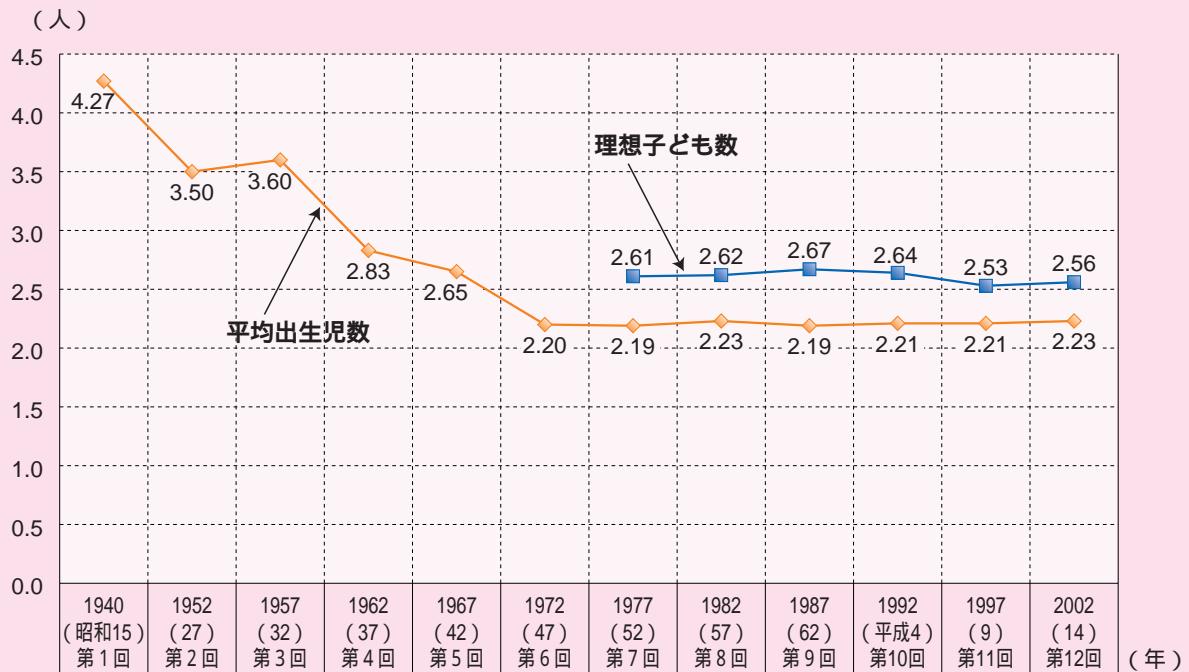
子育てに対して、心理的・肉体的負担があることや、子育てや教育の費用などの経済的負担があることなど、負担感が増大していることが、出生率に影響を与えていると指摘されている。

妻が考える理想の子ども数と、実際に持つ子ども数を平均値で比較すると、格差がある。2002(平成14)年では、理想子ども数は2.56人であるが、平均出生児数は2.23人である。両者

の調査を始めた1977(昭和52)年以降、実際に持つ子ども数は、常に理想の子ども数を下回っている。

なお、70年代以降、平均出生児数は、2.2人前後で一定しているが、第1章第3節でみたとおり、1960年代以降に生まれた女性の出生力はそれ以前と比較をして低下しているきざしがうかがえるので、今後は平均出生児数も低下するのではないかと推測されている。

第1-2-23図 平均出生児数・理想子ども数の推移



資料：国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(第10～12回)」、「出産力調査(第1～9回)」

注1：理想子ども数については、50歳未満の妻に対する調査

注2：平均出生児数は、結婚持続期間15～19年の妻を対象とした出生児数の平均。第9回調査は、初婚の妻を対象とした集計である。第8回、第10回調査と同一の初婚同士の夫婦に基づいた平均出生児数は2.19人である。

(理想の子ども数を持たない理由)

このような、理想と現実の乖離の背景は何であろうか。理想の子ども数を持たない理由の中で、最も多いのは「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」であり、全体で62.9%の人が指摘している。この他には、「高齢で生むのはいやだから」(33.2%)、「これ以上、育児の心理的・肉体的負担に耐えられないから」(21.8%)、「子どもがのびのび育つ社会環境ではないから」

(20.4%)が多い。年齢別にみると、「子育てや教育にお金がかかるから」はすべての年齢階級で最も多いが、若年層では圧倒的に高い理由となっている。このほかの理由をみると、若年層では、「これ以上、育児の心理的・肉体的負担に耐えられないから」と「子どもがのびのび育つ社会環境ではないから」が多く、35歳以上では、「高齢で生むのはいやだから」が多くなっている。

第1-2-24表 理想の子ども数を持たない理由

	子育てや教育にお金がかかりすぎるから	家が狭いから	自分の仕事に差し支えるから	子どもがのびのび育つ社会環境ではないから	自分や夫婦の生活を大切にしたいから	高齢で生むのはいやだから	これ以上、育児の心理的・肉体的負担に耐えられないから	健康上の理由から	欲しいけれどできないから	夫の家事・育児への協力が得られないから	夫が望まないから	一番末の子が夫の定年退職までに成人してほしいから	その他
総数	62.9	14.6	17.1	20.4	11.5	33.2	21.8	19.7	15.7	12.1	7.2	9.6	5.6

(%)

第1-2-25図 理想の子ども数を持たない理由

